



カラマツ間伐材の高度利用は時代のニーズ

カラマツはもともと北海道にはなかった、いわゆる外来樹種です。北海道に入植した長野県の人たちが、明治のころ、故郷を偲んで植栽されたのがカラマツ造林の始めだと言われています。ですから一般の人々が、昔から北海道に自生していた木だと思うのも無理もない話です。

現在の北海道のカラマツは、ほとんどが第二次大戦後の拡大造林の主要樹種として植栽されたものです。当時は坑木、建築用足場丸太など小径材の用途はいろいろあって、これを見込んでの造林でした。伐期は20年。林業は100年単位の仕事です。植えた人が収穫の恩恵に浴せないのが当たり前の産業なのです。カラマツ造林は収入が早く入るのが魅力でした。少なくとも当時の状況はそうだったのです。娘が生まれた時植えておけば、適齢期に達するころには立派な嫁入り支

度ができたのです。あちこちの農家がこぞって植えました。しかし、20年経つみると、石炭産業は壊滅的状況にあり、建築用足場丸太も組立が簡単で、自在に寸法が調節できる鋼管に代わっていました。

植えた方も、植えさせた方も、とんでもない計算違いがありました。当然、植えた人の方に、約束が違うと被害者意識が出てくるのも当然でしょう。

後で分かったことですが、まずいことにカラマツの未成熟材は材質的にいろいろ欠点があって、それまでの北海道産針葉樹の用途にはまことに使いづらいのです。まず早く生長するので年輪幅が大きくなります。しかし、いくら生長が早くても、20年ではやはり太さは十分ではありません。おまけに他の樹種に比べて、繊維がねじれて生長する度合が大きいため、製材後乾燥すると、著しく反ったり、ねじれたり、曲がったり、割れたりするのです。20年生のカラマツは、人間に例えると幼児期です。人間はしつけや教育を受けながら育つため、ひねくれる方が少ないですが、カラマツは自然の摂理にそむいてまで素直に育つ方がおかしいと思いませんか。そのようなことから当時のカラマツ小中径材の用途は付加価値の低い「梱包材」だけといつてもよいくらいだったのです。

そこで、カラマツ間伐材の処理技術、新しい用途、とくに付加価値の高い用途の開発が、社会的・行政的ニーズとして大きくクローズアップされて来ることは、当然過ぎることありました。

誤解を招くおそれがあるでお断わりしておきますが、材質に問題があるのは、植栽後10~15年、心の直径10センチメートル前後の部分だけです。それ以後に生長した部分は、むしろ他の人工林材に比べて、強度、耐久性に優れており、まったく遜色はありません。今では北海道の造林木のエリートとさえいえる存在であ



展示棟（東京）

注) タイトルバックの写真は、かなやま湖ホテルラーチ（コテージ）です。コテージおよび展示棟は北海校倉ハウスです。（厚浜木材加工協同組合提供）

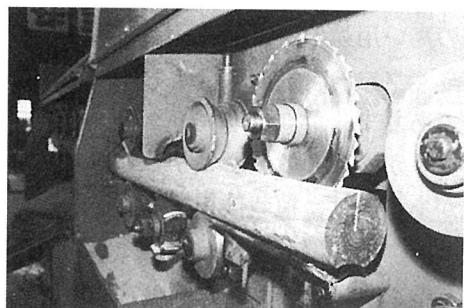
ると評価されています。ただ、中小径材の扱いにくさが余りにも強調され過ぎたため、残念なことに一般的にはカラマツ材のイメージはいまだに必ずしもよくありません。枝打ちなどの施業をきちんと行い、通直で大径材に育てれば、カラマツの前途は洋々なのです。このことを、造る方も使う方も理解を深めてほしいと思います。

北海校倉ハウスのスタートは間伐材の利用から

昭和40年代後半から50年代前半にかけて、林産試験場の主要な試験研究課題に、「カラマツ人工林間伐材の有効利用」がありました。書いてしまえば、たった一行のテーマですが、カラマツに縁のない部科は、ほとんどないと言ってよいくらいの総力戦でした。もちろん道行政が、社会的ニーズに明確に応える姿勢の一つでもあったのです。

基礎材質の研究から始まり、製材、乾燥、接着などの基本技術、構造用LVL, PT(ポール&トラス)型ハウス、遊具を始めとする屋外施設、ラチスピーム、トラスなどの構造用部材、パネルボードなどの内装材も開発されました。樹皮中の化学成分(ポリフェノール類)から耐水性木材用接着剤を製造するという化学的研究や接着剤用充填材の開発も行われました。また、カラマツ原木や、のこ屑で「キノコ」を栽培する研究まで、考えられる限りの試みが行われました。

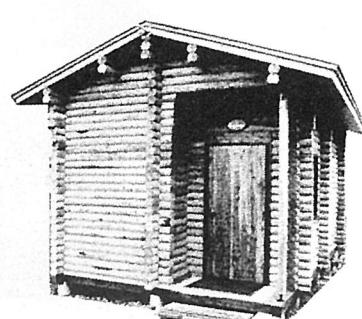
結果的には“太い木にこしたことはない”というものが大方の結論でしたが、小中径材を利用するに当たっての問題点や対処の方法について貴重な資料が十分に得られました。実際、基礎材質はいろいろな場面で役に立っていますし、カラマツ材の脱脂乾燥(やに抜き)、カラマツパネルボードやPTハウス、バーク堆肥など、すっかりお馴染みになりました。



円柱材の加工（昭和54年）



キャンプ本部・休憩所（道立旭川21世紀の森提供）



建設時（昭和55年）

なっている用途も多いはずです。

さて本来のテーマに戻りましょう。この北海校倉ハウス（ログハウス）の開発も、このプロジェクトの一つだったのです。林産試験場では、昭和54年、当時の西ドイツから円柱材製造機を導入しました。中小径丸太を利用する場合、一般的な矩形断面に製材するよりも歩留りが高く、生産性が高くなると考えられたからです。もっとも現在は、元口と末口の径の太さが違い過ぎる、曲がり材があるなどの理由で、製材を出発点にする場合も多いのですが……。

当初は、マシンカットした円柱材の用途は、遊具、あずま屋、フェンスなどの比較的小規模な屋外施設で、それが研究の対象となりましたが、やがて校倉式の構造物、いわゆるログハウスの開発へと展開していったのでした。

北海校倉ハウス（ログハウス）の試作

北海校倉ハウスは、壁体をプロジェクトタイプに組んで、軸ボルトで繋結する方法を探っています。また、北海校倉ハウスは生材の状態で組み上げ、縦にボルトを通して、形を拘束した状態で徐々に乾燥されるので、乾燥に伴う内部応力も次第に緩和されます。このことが、カラマツ小径材を生材で利用できるメリットの一つでもあります。壁全体を丸太で構成するので、一定の断熱効果も期待できました。

様々な基礎試験を終え、試作第1号棟が旧試験場（当時は旭川市緑町12丁目）の一角に建設されたのは、昭和55年のことでした。面積9.9平方メートル。「ハウス」とは名ばかりの、可愛らしい建物ではありましたが、それまで行われた地道な試験研究成果が、形になっ

たという点で画期的な出来事であったと思います。

そして昭和58年、中型のログハウスに挑戦しました。試作第2号棟です。間口6.68メートル、奥行き10.8メートルの平屋建てで、入口側に奥行き2.7メートルのデッキを設けた本格的なものでした。しかも小屋組には、これも林産試験場で開発したカラマツ小径材の製材で組んだ合板ガセットトラスを採用しました。床にはミズナラ、マカバの無垢のフローリングを敷き、マカバのテーブル・椅子を置きました。この建物は、試験場の会議室兼迎賓館として大いに活躍したものです。

また、この建物を用い、公開で大規模な耐力試験を行った結果、積雪1メートル時の地震荷重に対しても十分な安全性が確認され、構造設計上および施工上の貴重な技術指針が得られました。さらに59年には、樹種、断面形状の異なる各種の校倉式壁体の水平加力試験を行い、耐力に及ぼす壁長さ、軸ボルト、座金等の影響などが実験的に検証されました。これらの一連の試験は、後で紹介する特認のための評定を意識したものであったのです。

昭和61年12月、それまで旭川市の札幌寄りのはずれにあった林産試験場は、西神楽の現在地に移転しました。この構内にもログハウスが建っています。現在は、地域住民サービスの一つとして、このログハウスの内外に木製遊具を配置し、常設の子供の遊び場として解放しており、毎日賑やかな子供の声で満ちあふれています。この建物も職員の手による試作第3号棟です。床面積133平方メートルあり、周囲を130平方メートルの回廊で囲んだ、なかなか本格的なものです。これは丸太組構法がオープン化されてからのものであり、丸太組構法基準に適合した北海道第1号の建物でした。

ちなみに、試作第1号棟は旭川市郊外の森林公園に休憩室として、第2号棟は市内のスキー場に事務所・休憩室としてお嫁入りしました。

建築基準法の壁とログハウス建設部会の設立

ログハウスの技術は完成しました。問題はこの技術の普及です。設備投資が嵩むのはもちろんですが、それよりも、建築基準法が大きな壁となって立ちはだかっていました。10平方メートル以上のログハウスはもちろん建築基準法の適用外であったし、それ以下であっても、用途に制約がありました。ただ、建築基準法には、その適用外の建物について救済条項があり、簡単にいえば建設大臣が、「建築材料や建築方法が、建築基準法で定める建築物と同等以上の効力がある」と認定すれば建てることができるようになっています。俗に言う「特認」です。ご存じかどうか、実際に「特認」を受けようとすると大変な労力とお金と期間がかかります、例えば、間取りも1件30プラン以内と決められており、その一つひとつについて構造計算も必要です。それに「特認」が下りても、一定の講習をクリアした業者以外は建てることができない仕組みになっていますし、建築の管理監督も、届け出た特定の設計技術者以外ではだめでした。当時のログハウス産業は、まだはしりであり、将来の需要の見通しも不透明な状況ですから、一中小企業が単独で飛びつける分野ではなかったのです。

そこで北海道では林産試験場が開発したログハウスの特認を、北海道林産技術普及協会が団体として取得し、ログハウスメーカー会員みんなで活用しようということになったのです。当協会の「ログハウス建設部会」が誕生したのはこの時でした。林産試験場で実施した一連の構造試験と施工試験のデータをもとに、建設部会員とジョイントした建築設計事務所が、具体的な設計図書の作成など、特認に向けた作業を行い、この時に正式名称が「北海校倉ハウス」と決まったのです。この結果、昭和59年7月には、最初の「北海校倉



カムイスキー学校（旭川神居山スキー場株式会社提供）



試作第2号棟



建設時（昭和58年）

「ハウス」標準型28プランが評定をパスすることができました。その後、樹種、断面形状などの異なる6タイプ168プランが相次いで評定をパスし、昭和60年7月には、北海校倉シリーズのすべてが建設可能となりました。そして「個別認定」による建設実績を順調に積重ね、早くも60年10月には、「一般認定」の閑門を通過することができました。その時の建設大臣は木部佳昭氏でした。当時の林産技術普及協会会長の故村上彦二氏宛ての評定書が、今でも普及協会事務所の壁に掛かっています。日本でのログハウスの特認は、昭和45年から平成元年までにすでに40件を数えています。しかしこれらはすべて外国からの輸入品であって、国産材、国産技術による本格的なログハウスとしては、初めての建築基準法第38条による特認であり、全国的にも大きな注目を集めることになりました。「評定書」はその記念碑です。

戸惑ったログハウスのオープン化

北海校倉ハウスの特認作業を進めていた丁度その頃、日本と諸外国との貿易摩擦がエスカレートの一途をたどり、大幅な貿易黒字に対して外国とりわけ米国からの市場開放の要求は高まるばかりでした。政府がこれらの外圧を緩和するためのアクションプログラムを策定したのは、北海校倉ハウスの一般認定に先立つことわずか3か月前、昭和60年7月のことありました。

一方、国内ではアウトドア指向の高まりの中で、ログハウス建設が静かなブームを呼び始めていて、ログハウスやアウトドアライフに関する愛好者向けの書籍、雑誌が数多く発行されるようになっていました。しかし、前にも述べたように個人がログハウスを建てるために建設大臣の特認を受けることは、現実には不可能といつていいのです。実際に、昭和59年9月時点で、



試作第3号棟（現 木路歩来）

道の建築指導課が調査した結果、既に北海道内にログハウスは76棟（把握できたもの）あり、用途も一般住宅から、ホテル、旅館、喫茶店、飲食店、店舗、展示場、事務所、アトリエ、バンガロー、避難小屋まで実際に多彩で、不特定多数の人が出入りする建物が大半でした。当然これらの建物はすべて建設大臣の特認は受けておらず、ほとんどが違法建設物だったのです。

作家の倉本聰さんご夫妻が林産試験場をお訪ねになったことがあります。まだ林産試験場が緑町にあった頃のことです。倉本さんは、当時から自然や緑を大切にする姿勢の明確な方で、今にして思うとログハウスにも関心を強くもっておられたように思います。人気テレビドラマ“北の国から”に登場した「五郎の家」をはじめ、演劇を志す人を集めた倉本さん主催の富良野塾の建物も、自然の大木を組んだログハウスでした。倉本さんは、北海道のログハウスの草分けといってよい人ではないでしょうか。随分前のことなので記憶は定かではありませんが、林産試験場がログハウスの研究をやっていると聞いてお訪ねになったのだと思います。場内をご案内した後、話がログハウスに及び、「倉本さんがお建てになったログハウスは法的には違法建築ですよ」とアドバイスすると、「林産試験場は、そういう取り締まりをやる機関なのですか？」「いや単なる技術的アドバイスです」、こんなやりとりがあつたように記憶しています。当時はまだ国も道もログハウスの規制については、態度もあいまいで、実態の把握にも積極的ではなかった時代のことです。その時の会話の細かいきさつはよく覚えていませんが、少し間をおいて、実際に建物の安全性を確かめてほしいという依頼があり、林産試験場が現地に出向いて耐力試験を実施しました。結論は、法的にはともかく、安全性には問題がないということでした。軸ボルトが入っていないので、万一横から強い力が加わると、ログとログの重ね合わせ部分がずれるというデータでしたが、現実的には倒壊などの危険はないということです。

こうした時代の流れを反映して、建設省では専門委員会を設置、ログハウスの設計基準の検討を始めました。この結果61年3月29日建設省告示として「丸太組構法技術基準」が公布され、同年6月1日施行の運びとなったわけです。

一方、北海校倉ハウスは60年10月1日付で「一般認定」を取得し、いよいよ「システム認定」に向けて走り出した矢先だけに、これは一寸した波紋で

ありました。折角取得した権利を侵害されたようでもありましたし、「ログハウス建設部会」の今後の活動をどう展開していくのかも問題でした。そして、平成2年5月、さらに規制を緩和した第2回目の告示が公布され、6月15日から施行されています。

現在では、告示の技術基準を守りさえすれば、かなり自由にログハウスを建てることができるようになりました。面積が300平方メートル以内ですよとか、壁線と壁線の距離は8メートル以内ですよとか、いろいろ制約はあります。ボルトの間隔や場所にも規制があります。しかし、特別広い建物や特殊な用途でない限り、大抵の物は建てられるようになりました。誰が設計してもよいし、誰が建ててもよいのです。もちろん確認申請や建築届けは通常の建築物と同じように手続きしなければなりませんが。とはいっても、ずぶの素人が実際居住できる規模のログハウスを建てるのは至難の技でしょう。幸い、告示された技術基準は、北海校倉ハウスの構法と十分に整合性がとれており、認定されている多くのプランをアレンジすれば、フリープランにも十分対応できるようになっています。もちろん300平方メートル以上のプランは告示の該当外ですので、北海校倉ハウスの一般認定の権利を生かすことができます。この点は先発メーカーとして有利なことはいうまでもありません。また、デザインも含めて建設の自由度が増せば、それだけ新規需要も期待できることになるでしょう。それは結局経験豊富で実績もある部会員企業にとってもプラスの条件です。こうして今でもログハウス建設部会は、情報交換、親睦の場として機能し続けています。

もちろん問題がないわけではありません。ログハウスの建設に積極的に取り組んでいるメーカーは2社しかありません、これからは外構部材やエクステリアなどログハウス以外のさまざまな分野を対象として、組織を再編成する必要もあります。また、カラマツだけでなく、今後トドマツの間伐材が大量に生産される時代になります。これらの有効利用も、これまでに身につけてきたカラマツの経験を生かして、新たな活動を始めなければなりません。

北海校倉ハウス建設部会は国産材ログハウス建設の草分け

当協会のログハウス建設部会は、日本における国産材ログハウスの草分けです。特認を取得した当時4社であった部会員も現在は表の7社で構成されています。これらのログハウスメーカーはいずれも製材、楽器材、集成材、防腐・防虫処理木材、土木用杭丸太など、木材関連事業を営んでおり、ログハウス専門の業者はいません。古い資料で申しわけありませんが、北海校倉ハウスの建設実績は、昭和59年から平成3年までの8年間で461棟に上がっています。この数値には10平方メートル未満のものは入っていませんので、これらを含めると、平成元年度現在600棟を超えるといわれ

表 ログハウス建設部会員一覧

◆厚浜木材加工協同組合	(0153) 65-2321
〒088-1350 厚岸郡浜中町大字琵琶瀬茶内	
◆株式会社ザイエンス札幌支店	(011) 563-5551
〒064-0808 札幌市中央区南8条西13丁目	
◆深川林産株式会社	(01642) 4-3171
〒078-0151 深川市納内町3526番地7	
◆協同組合連合会北見カラマツセンター	(0157) 42-3434
〒091-0026 常呂郡留辺蘿町旭99	
◆京極町森林組合	(0136) 42-2211
〒044-0112 虻田郡京極町字春日170番地	
◆置戸林産流通加工協同組合連合会	(0157) 55-2026
〒099-1361 常呂郡置戸町字境野8番地	
◆当麻町森林組合	(0166) 84-2311
〒078-1304 上川郡当麻町4条西4丁目1番2号	



かなやま湖 ログホテル「ラーチ」
ホテル棟(左)とレストラン棟(右)

ホテルラーチ内部
(厚浜木材加工協同組合提供)



ています。円柱材は、建物以外にフェンス、ベンチ、遊具、案内板など様々な屋外施設にも活用されています。営業活動は、部会員各社が独自に展開しているので、販売実績もまちまちです。ログハウスについていえば、前出の461棟中75%は2社で占めています。これは各社の商品構成や生産能力によるものであって、中大型公共施設、住宅を中心に販売している企業、公園のトイレ・物置、あずま屋などの10平方メートル未満の建物や、フェンス、遊具などを中心に販売している企業など様々です。

増えてきたログハウス願望

林産技術普及協会の事務局のある「木と暮らしの情報館」の芝生に1棟の北海校倉ハウスが展示してあります。移動展示用にログハウス建設部会が建てたものです。ちょうど「木と暮らしの情報館」への通り道にあるので、おいでになるお客様のほとんどは、熱心に中を覗いて行かれます。たった3坪ほどの小さな小屋で、内部には何も置いてありませんが、前面に可愛いデッキも付いており、夢をかき立てるには十分でしょう、詳しい説明を求められることも結構多いのです。自宅に空き地があるので書斎を建てたいとか、林を持っているのでウイークエンド・ハウスを建てたいとか、夢は様々です。自宅をログで建てたいという豪勢な人もまれにはいます。週末を過ごすのに10坪程度のものを希望する人が多いようです。毎週でも行って、ゆったりと自然を楽しみながらリフレッシュしたいというわけです。



別荘（厚浜木材加工協同組合提供）

このようなライフスタイルを求める人が、最近増えてきているらしいのです。昔、「別荘」というのは一種のステータスシンボルであって、ついお金持ちを連想してしまいます。しかし、今は退職したご夫婦とか、働き盛りの30・40代の人が結構多いのです。

豪華でなくてもよい。週末の1日、2日でも、一刻喧騒の世界を離れてみたい。そこでは、森の小鳥のさえずりを聞きながら昼寝もできる。静かな音楽に耳を傾けながら自分だけの世界に浸ることができる。森の小道や田圃のあぜ道を散歩するだけでも、気持ちがさわやかになります。ミニ菜園を家族みんなで作ったり、近くの池やせせらぎで水と戯れたり、釣りを楽しむこともできます。冬はスキーで好い汗をかきたい。

話を聞くと、ログハウスを建てたい人の「週末」のイメージは大体こんなところでしょうか。これなら10坪の小さな小屋でも十分です。以前の別荘のイメージというのは、豪華な洋館と至れり尽くせりの設備が整っており、そこでゆっくり休息をとったり、ゴルフやテニスで心のゆとりを取り戻す。お金持ちが年に何回か訪れ、ほんの短期間楽しんで、また都会の喧騒に帰って行く。といったもので持ち主の年間利用率はかなり低いといわれています。

しかし今、別荘のイメージが変わってきています…。というよりも、新しい別荘族が誕生しているのです。ロシアにもダーチャと呼ばれる別荘があります。昔からある庶民の別荘です。私も旧ソ連時代にハバロフスクを訪れた時、郊外でかいまま見たことがあります。いかにも手造りの物置のような小屋があり、その前には家庭菜園が広がっています。週末は家族総出で農作業に汗を流すのです。ロシアの食糧事情も背景にあるらしいのですが、週末の過ごし方は国さまざま、人さまざまですね。

新しいライフスタイル、ただ今進行中

「週末」という言葉は日本にも以前からありました。これは英語のウイークエンドの直訳であって、肝心の中身は単なる「日本流」土日に過ぎませんでした。子供は塾通いとファミコン、亭主は昼寝かテレビ、ゴルフ、主婦は相変わらずの家事労働というパターンです。突然のように週休2日が現実のものになった時、働きバチの日本人は、毎週やって来る2日間の休日をどう過ごしてよいやら戸惑ったようでした。日本の週

休2日は労働時間短縮に対する外圧が高まった結果、生活様式や労働形態、社会的環境を変えることなく、お上から与えられたものだったのです。

欧米の週末のイメージは、家族揃ってレストランへ出かけたり、車でキャンプへ出かけたり、別荘へ出かける。そこでは、釣りを楽しんだり、登山や散歩をしたり、水と戯れたり、デッキでバーベキューをしたり、ともかく「非日常的」な時間や空間を楽しむことができる社会的環境が整っているのです。

また欧米人のパーティ好きは有名です。誕生日だといつてはパーティ、何か事あるたびに、友達を呼んだり、呼ばれたりします。庭の広い芝生やプールサイド、ボードハウスが、さまざまなコミュニティの交流の舞台になるのです。こうなると広い敷地が必要となるし、日本の宅地事情では、欧米流の週末は無理なのかもしれません。

しかし、近頃の若い人を見ていると、実に遊びが上手で、休日を持てあます人などいないように見えます。今、ようやく日本の週末も変わりつつあるのです。よりクリエイティブで新鮮なライフスタイルに憧れる人は確実に増えています。それに伴って社会資本の整備も本格的に進みつつあるようです。キャンプ場やオート・キャンプ場もシーズンには予約で満員だと。キャンプ場ではテントも貸してくれるし、貸キャビンもたくさんあります。森の自然を享受できる森林公園はいまや一村一品のような存在となっています。今、各省政府や自治体がアウトドアライフの推進と過疎化対策に力を入れているからです。これに車社会が弾みをつけました。人々も、家にいては享受できない楽しみ方を、遠くに出かけることで充足しているように思われます。



JR 細岡駅（釧路湿原）



監視小屋（森町）

(厚浜木材加工協同組合提供)

ウッディエイジ 1997年12号

アウトドア時代の幕開け

今、みんな緑に渴望しています。最近のテレビによると、大都会の緑化が盛んに行われているといいます。歩道と高層ビルの間に、高い木で並木を造成し、快適な歩行空間を確保しようというのです。しかし、こうした発想はどう見ても物理的に限界があるとされています。結局、自分から緑を求めて外に出かけざるを得ないのが現状なのです。庶民のアウトドア志向がこれを象徴しています。

本屋さんを覗くと、大抵アウトドア・コーナーがあり、ログハウスの雑誌から、オートキャンプのハウツー、山菜の見分け方・採り方・調理法、キャンプ用品のカタログ、釣った魚の燻製法…などなどきりのないほどの書籍で溢れています。

道路を車で走っていても、なんと多くのオフロード車とすれ違うことでしょう。オフロード車の乗り心地は決して快適とは言えません。それでも、テントや寝袋、炊事道具、携帯用のベンチ・テーブル、そしてサーフボードやフィッシング・グッズを満載して、高い運転席から対向車を見下ろすようにハンドルを握ります。オフロード車の車内空間そのものが、すでに非日常的なのです。時代のファッショントリニティなのでしょうか。でも、これらの読者やドライバーの何%かは、ログハウスの潜在的需要者ではないか、と私は思っています。

彼らの多くは、窓を開けると、隣の家か道路しか見えない住宅密集地に住んでいます。大都会では、隣と軒を接するように建っていて、庭さえもありません。さわやかな自然の風と緑を求めて、彼らはアウトドアを走ります。

最近よく見掛けるのが、中高年のご夫婦のドライブ姿です。核家族化が進行し、中高年の人は自分で自分なりの余暇の過ごし方を工夫しなければならなくなっているのでしょうか。私はドライブと写真が好きで、野生の花を求めて野山や海岸線を走ります。こんな時、こんな所にと思うような場所で中高年のご夫婦に出くわすことが多いのです。まだ一部かもしれないが、「美味しい料理を食べて、温泉につかる」といった、日常的

な旅に飽き足らなくなっている人たちは確実に増えています。

こうしたライフスタイルの究極が、自分のログキャビンを持つことではないでしょうか。もちろんログハウスではなくても構いません。1日、2日ゆったりのんびり過ごせる小屋がひとつあればよいのです。ログハウスは私のこだわりなのです。

ログハウス個人需要はこれから

ログハウスの建築数が結構多いことはすでに述べましたが、これらの多くは、公園事務所、展示施設、貸別荘、ホテルなど公共施設が多く、戸建ての小さなキャビンは極めて少ないのです。10坪程度のキャビンであれば、価格も中級輸入乗用車くらいのものであって、決して高くはありません。土地も、山林であれば、1町歩100~300万円あれば手に入るはずです。問題なのは、ログハウスメーカーが、一戸建てのログハウスを売ることに執着が無いからではないでしょうか。公共事業の需要は一応充足して一段落つきました。だからといって、ログハウスそのものの需要がなくなったとは思いません。私は、むしろ個人需要はこれからだと思っているのです。

しかし、彼らはどうやって自然の豊かな土地を手に入れることができ、誰に頼めばログハウスを建てて貰えるのか、彼らはそれを知らないのです。ログハウスメーカーも森林組合も、建設業者も全く彼らに情報を発信していないのです。そんな情報を提供することこそが、戸建てのログハウスの販売を促進することになるのではないかと思うのです。あるいは森林組合や不動産屋、建築屋さんなどと提携して、手放したがっている山林や不要の離農跡地などを斡旋してあげることも、強力なサポートになるでしょう。

また、家族やグループで、自分の手でログハウスを組み立ててみたい人もいます。そのためには、北海校倉ハウスも乾燥材キットを提供できる体制がほしいですね。10坪以下のログハウスであれば、間取りも単純だし、キット化は難しくないはずです。

一方、民有林の経営が危機に瀕していることは誰でも知っています。間伐は進まない、造林意欲は年々減退しています。土地開発のため伐る一方で、自然是減少の一途をたどっています。もし民有林が別荘地として、自然を愛する人に渡ったとすれば、その林は太る

ことはあっても、伐り払われることはないでしょう。森林保全の一つの方法でもあると思えるのです。

これからの誘導の仕方によっては、戸建てのログハウスの需要は増えると思います。「ログハウスを売る」ということは、「新しいライフスタイルを売る」ことでもあります。言い換えれば、「新しいライフスタイルを売る」ことが、「ログハウスを売る」ことなのです。

終わりに：私事で恐縮ですが、北海校倉ハウスを建てました

1990年春、旭川市近郊に、600坪のカラマツ人工林を手に入れ、翌年総面積12坪のささやかなログハウスを建てました。もちろん北海校倉ハウスです。林産技術普及協会のログハウス建設部会の一員である当麻町森林組合にお願いして建てて貰いました。屋号は「木楽也」。「木を楽しむ」と「気楽なり」をかけてこうなりました。

ハウスとは言えないほどのささやかな小屋ですが、リビング、ダイニング、キッチン、寝室（ロフト）、トイレがあり、一通りの生活をするのに不自由はありません。暖房も完備しています。

ログハウスを建てた翌年、たまたま家内が陶芸に親しんでいることから、裏手に8坪の総カラマツ造りの物置兼陶房を建てました。半分が土間の部屋、半分は吹き抜けになっており、もちろん「陶房きらく」の看板がふら下がっています。電動ろくろ、電気炉、薪をたく樂焼きの窯などが備えてあります。

私たち夫婦は、気ままに林を訪ね、陶芸のまねごとをしたり、散歩したり、花の写真を撮ったり、近くの沼や川で釣りを楽しんだり、心おきなくCDを聴いたり、日だまりで読書をしたりして過ごします。時には遠来の客への迎賓館にもなります。屋外でのバーベキューは好評です。最近、薰製も手掛けるようになりました。スマートサーモン、ベーコンなど手造りの味を手造りの食器で味わうのはまた格別です。

毎日が日曜日になった今、小さな林の小さなログハウスは、老夫婦の暮らしにとって、かけがえのない存在になりつつあるのです。

本写真掲載にあたり、厚浜木材加工協同組合 鈴木様、旭川神居山スキー場株式会社 前田様、道立旭川21世紀の森 鈴木様のご協力をいただきありがとうございました。
（前 当協会副会長）